

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

二人の皇子と根日女 恋と勇気のお話



伝説 二人の皇子と根日女
恋と勇気のお話

紀行 志染の里から玉丘へ

- ・ 志染の里の風景
- ・ 志染の石室
- ・ 志染周辺の文化財
- ・ 根日女の里
- ・ 山伏峠
- ・ 玉丘古墳群

関連情報 用語解説
参考書籍
所在地リスト

二人の皇子と根日女 恋と勇気の物語

今から1500年ほど昔、大和国（やまとのくに＝現在の奈良県）では、天皇のあとつぎをめぐる争いが起こりました。政治をにぎった雄略天皇（ゆうりゃくてんのう）は、競争相手だった市辺王（いちべおう）を殺してしまいます。市辺王の二人の子どもは、播磨国（はりまのくに）までのがれて、現在の三木市（みきし）にあった志染村（しじみむら）の窟屋（いわや）に、かくれ住むことになったのです。

二人の名は、兄が「億計皇子（をけおうじ）」、弟が「弘計皇子（おけおうじ）」といました。そしてふたりは身分をかくし、志染村の長であった細目（いとみ）の屋敷で、働くようになりました。

そんなある日、皇子たちは、ひとりの娘にめぐり会いました。娘の名は根日女（ねひめ）といました。一目見るなり、二人は、美しくてやさしい根日女を好きになりました。けれどもおたがいにゆずりあって、なかなか言い出せません。根日女は、二人が皇子だなどは夢にも思いませんでしたが、りりしい皇子たちを好ましく思いました。けれども二人ともすばらしい男性です。どちらかを選ぶこともできないまま、日々は過ぎていったのでした。

やがて雄略天皇が亡くなり、その後を清寧天皇（せいねいてんのう）がつぎました。

そんなある年、細目の家では、新しく建てた館を祝う宴（うたげ）がもよおされることになりました。そこには、播磨国にある朝廷（ちょうてい）の領地を見回りに来ていた、山部連小楯（やまべのむらじおだて）も来合わせていました。

やがて宴が始まると、細目はふたりの皇子に命じて、神様をお祭りする灯火（ともしび）をつけさせ、さらに、新築のお祝いの歌を歌うように命じたのです。こういうことは、身分の低い者の仕事でした。二人はしばらくの間ゆずりあっていましたが、やがて弟の弘計皇子がつと立ち上がると、高らかに祝いの歌を歌い始めました。

そしてお祝いの歌が終わると、皇子は勇気をふりしぼってさらに歌を続けたのです。

「たらちし、吉備（きび）のまがねの、狭鋤（さぐわ）持ち、田打つなす。手打て子ら、吾（あ）れは舞（ま）いせむ（吉備の国の鉄で作った鋤（くわ）をもって、田を耕すように、さあみんな手を打て、私はおどろう）。」

そしてさらに続けた歌に、人々はとび上がるほどおどろきました。

「淡海（おうみ）は水たまる国、倭（やまと）は青垣、山投（やまと）にましし、市辺の天皇が、御足末（みあなすえ）、奴（やつこ）らま（近江は水の豊かな国、大和は山に囲まれた国、私たちは、その大和におられた市辺の天皇の子なのですよ）。」

あまりのおどろきに、人々は屋敷を走り出て地面にひれふしました。大和から来ていた山部連小楯は、この歌を聞いて大いに喜びました。

「母君は食事もめし上がらず、夜も寝られないほどなげき悲しんで、この皇子たちの行方（ゆくえ）をさがしていらっしまったのです。」

こうして二人の皇子は、晴れて都へ戻ることができました。

都へ戻ってからも、二人は根日女のことを忘れませんでした。けれども都で大切なまつりごとをしなければならぬ二人には、根日女を訪ねる時間はなかったのです。

そうして時は流れ、年が経ち、とうとう根日女は亡くなってしまいました。それを聞いた二人の皇子は深く悲しみ、使者をつかわしてこんなふうな命令しました。

「一日中、日がよく当たる場所にお墓をつくってください。根日女のなきがらを納めたら、そのお墓をきれいな玉でかざりましょう。」

やがて大きな墓がつくられ、根日女はほうむられました。村人たちは、玉でかざられて美しくかがやく墓を「玉丘（たまおか）」と呼んで、いつまでも根日女のことを語り伝えたということです。

その後二人の皇子は、天皇の位を継ぐことになりました。その時、兄の皇子は、「おまえが勇気を出して歌ってくれたから、都へ戻れたのだよ」と、弟に位をゆずり、3年後、弟が病気で亡くなってからその座につきました。

若い日々を苦勞のうちにすごした二人は、ともに立派な政治をおこなったので、その時代には争い事などひとつも起きなかったそうです。

紀行「志染の里から玉丘へ」

志染の里の風景

神戸市西区押部谷町（おしべだにちょう）。古くからの村や田園風景と、新興住宅とが入りまじった町を通り抜け、クヌギやコナラが育つ丘を北へ登る道を行くと、やがて、神戸市北区から三田（さんだ）方面と、三木市御坂（みきしみさか）方面への分岐に至る。最近整備されて、道幅が3倍にもなった御坂への道へと左折してしばらく進むと、長い下り坂になる。それを下りきった所に流れる川が、志染川（しじみがわ）である。

少し前までは、緑濃い里山が連なり、桜のころには「春の女神」とたたえられるギフチョウが舞っていたこのあたりも、高速道路が通り、道が整備され、広大な防災公園が造成されて、景観は急速に変わりつつある。

その里の一角に、1500年以上も前の伝説を伝える窟屋（いわや） 志染の石室 が、往古から変わらないまま残されている。

志染の石室



旧道に立つ道標



道標

志染の石室道

御坂の交差点から志染川を渡って、少し南へ道を戻ると、幅広い道の左手に細い旧道が分岐する。その旧道を少し登ると、トタン張りの小屋の角に、草に埋もれるように「志染の石室道」と彫られた道標が建っている。左へ折れて村の中を通る細い道を東へ向かうと300mほどで駐車場があり、そこから谷沿いに整備された山道を歩くと石室へと導かれる。

石室は、谷に面したがけの下にある。高さ5～6mほどのがけの下1/3ほどが深くえぐられて、幅の広い洞窟（どうくつ）のようになっている。がけは、拳よりも小さい石が集まった「礫岩（れきがん）」でできていて、水がぼとぼと落ちているから、おそらく長い年月の間に、わき水による侵食や崩落でできたのだろう。

石室の前には玉垣があり、その中に小さな祠が祭られている。脇にはたくさんの石仏が、訪れる人を見つめている。石室の中をのぞいてみると、深さの知れない水がたまっている。二人の皇子もこれでは暮らせないだろうから、伝説ができた奈良時代以前には、少なくとも現在のような水たまりはなかったに違いない。



志染の石室



志染の石室

この水は冬から春にかけての時期、不思議な現象をおこすことがある。「窟屋（いわや）の金水」と呼ばれる現象である。水面が金色に輝くというこの現象は、ヒカリモという小さな藻によっておこるのだが、ごく限られた場所で見られる。志染の石室では久しく絶えていたそうであるが、2002年頃から、再び見られるようになった。生物と環境の微妙なバランスでできる、不思議な光景である。



石室には湧き水がたまっている



金水現象(2007年2月21日撮影)

志染周辺の文化財

志染周辺には文化財が多い。その中からいくつか、興味深いものをたどってみよう。

伽耶院



仁王門



二天門



伽耶院境内



本堂



多宝塔



白稲荷

石室から、志染川を挟んだ対岸にのびる山には、修験道（しゅげんどう）の名刹（めいさつ）、伽耶院（がやいん）がある。山陽道三木東インターチェンジができて、すっかり人工的な景観になったあたりを少し北へと抜け、細い流れに沿って東の山ふところへと入ってゆくと、ほどなく仁王門が見えてくる。仁王様は、豊臣秀吉（とよとみひでよし）の兵火で焼け残ったものと聞かすが、頭部も足もなく、ひどく傷んでいる。

仁王門の脇を抜けてさらに奥へと進むと、あたりには深山のような雰囲気漂い始め、すぐに「二天堂」と呼ばれる門が見える。門をくぐり、木々に覆われた階段を登ると、そこが伽耶院の本堂である。

落ち着いた瓦葺（かわらぶ）きの本堂の前には、ひときわ太いモミの木が2本、天を指している。本堂は、密教寺院の建築様式を踏んでいるということだが、あたりは、それに似つかわしい静寂に包まれている。本堂の東には多宝塔が優美な姿を見せ、少し奥まって、三坂明神社（みさかみょうじんじゃ）が祭られている。かつては修験道の寺院としてにぎわい、数多くの堂坊を連ねていたそうだけれど、今の静かなたたずまいからは想像も及ばない。

多宝塔の脇に、たくさんの石うすを積みあげた、「白稲荷」という小さな祠があった。これには「昔、このあたりの田は、水が流れ出るのを止めるため、あぜの水口（みなくち）に石うすを置いていた。ところがある干ばつの年、狐（きつね）が老人に化けて村中の田から全ての石うすを取り去り、水を平等に分けた。これを見て恥じた村人たちは全ての石うすをここに奉納した。」という伝説があるという。

三木城



三木城遠景



美囊川と三木城の夕景

志染川に沿って西へ行くと、三木の市街地に至る。その中心にあるのが、三木城跡の上の丸公園である。元は市街地部分も広く城郭（じょうかく）に含まれていたが、現在は本丸部分だけが残って、公園となっている。本丸の下には、今も古い町並みの雰囲気を残す道があるから、ゆっくり歩いてみれば、何か新しい発見があるかもしれない。城の下を流れる美囊川（みのうがわ）のほとりも、心地よい散歩道になっている。

秀吉と、毛利方についた別所長治（べっしょながはる）との攻防戦は2年近くの間続くが、頼みとしていた支城が次々に落ち、毛利氏による兵糧（へいりょう）の運搬も押さえられるに及び、別所長治は城兵の命と引き替えに切腹して、ようやく戦いは終わった。長治は今も三木の人々に愛され、毎年5月には「別所公春祭」がおこなわれているそうである。



別所長治辞世歌碑

根日女の里

根日女（ねひめ）の里は、志染の西にある賀毛郡（かもぐん）である。上鴨（かみがも）、下鴨（しもがも）、三重、檜原（ならはら）、起勢（きせ）、端鹿（はじか）、穂積（ほづみ）、雲潤（うるみ）、河内（かわち）、川合（かわい）という十の里名が『播磨国風土記』に見えるが、これらは現在の加西市（かさいし）から加東市（かとうし）にかけての地域に当たる。これらの里を治めていたのが、根日女の父、許麻（こま）だったのだろう。

根日女が住んだのは玉野の村と記されているから、玉丘古墳（たまおかこふん）がある場所の少し東に当たる。志染からは、直線で25kmほど離れているだろうか。玉野も玉丘も、現在は豊かな田園風景が広がる所である。里の西には玉丘古墳群、北西には山伏峠の石棺仏があって、このあたりが古墳時代に栄えたことがよくわかる。

山伏峠



山伏峠

玉野の交差点の、南西にある丘陵の頂上付近が山伏峠（やまぶしとうげ）である。現在の県道ができる前は、この丘陵の上を通る道が街道だったようだが、今はサイクリングコースになっている。

坂道を登ると、竹やぶと雑木に囲まれて3基の石仏が建っていた。どれも石棺の蓋（ふた）の内側に阿弥陀仏を刻んだもので、手前に建つ巨大な家形石棺（いえがたせっかん）の蓋に刻まれたものと、いちばん奥にある長持形石棺の蓋に刻んだものは、県指定の文化財である。

今となっては、これらの石棺がどの古墳から掘り出されたものかわからない。無傷のまま発掘されていたら、どれほどの成果があったらと思うけれど、その一方で、いかにも所を得たという風情の石仏を見ていると、失われたものと残されたものと、どちらに価値があるのかわからなくなってくる。

石の表面に目を近づけると、鑿（のみ）の跡が残っているのがわかる。古墳時代のものと中世のもの、500年以上離れた石工の鑿跡が重なっているはずである。



家型石棺に彫られた像

長持形石棺に彫られた像

玉丘古墳群



玉丘古墳を望む

田園風景が広がる中に小山のような姿を見せるのが、古墳群の中核、玉丘古墳である。周囲を取り巻く濠（ほり）には、蓮（はす）が茂り、花が咲き競う夏を思わせる。濠に沿った小径をたどることもできるが、森に覆われた古墳には、「玉で飾られた」という伝説をしのばせる所はない。墳丘には、葺石があったことがわかっているから、それが遠目には玉のように見えたのだろうか。光沢のある河原石ならば、そんなこともあったのではないかとも思えるが、それも空想の域を出ない。伝説はどこまでも夢の中の存在である。



玉丘古墳

古墳群は公園として整備されている。そのうちには、石室や石棺が復元移築されたものもあるから、古墳の構造を学ぶには格好の場所である。



説明板

用語解説

【顕宗天皇】けんぞうてんのう

第23代の天皇。『日本書紀』によれば、在位は485～487年。名は弘計（おけ）。父の市辺押磐皇子（いちべのおしはおうじ）が、雄略天皇に殺されたために、兄の億計（をけ）とともに播磨に逃れ、雄略天皇の死後に名乗り出て即位したという。

【仁賢天皇】にんけんてんのう

第24代の天皇。『日本書紀』によれば、在位は488～498年。名は億計（をけ）。父の市辺押磐皇子（いちべのおしはおうじ）皇子が、雄略天皇に殺されたために、弟の弘計（おけ）とともに播磨に逃れ、雄略天皇の死後に名乗り出て弟に次いで即位したという。

【石棺仏】せっかんぶつ

石棺の部材を利用して作られた石仏。石棺の蓋（ふた）のような板状の石材をそのまま利用して、浮き彫りで石仏をあらわしたものが多い。加古川市、高砂市、小野市、加西市など、加古川流域西部に多く分布する。13～16世紀に製作されたものが多いと考えられている。

【長持形石棺・家形石棺】ながもちがたせっかん・いえがたせっかん

長持形石棺は、古墳時代中期に盛行した石棺。底石の上に側石と小口石をはめ込み、かまぼこ形の蓋（ふた）をのせる。蓋石の各辺や側石の両端に1～2個の突起（縄かけ突起）を作り出す。加古川下流の竜山（たつやま）に産する石材で作られた例が多く、近畿地方中央部の大型古墳の埋葬施設に使用されているため、「王者の石棺」とされる。

家形石棺は古墳時代中期に始まり、後期に普及する石棺の一種。蓋の頂上部が平坦で、そこから側面に向かって屋根状の広い斜面となる。棺身とあわせて家の形を連想させることから命名された。蓋の長辺に2個、短辺に1個の突起（縄かけ突起）を持つものが典型的である。棺身には、くり抜き式と組み合わせ式とが見られる。

播磨地域で見られる長持形石棺・家形石棺は、いずれも竜山石（あるいは類同の高室・長などの石材）を用いたものである。

【埴輪】はにわ

古墳に立て並べた、日本固有の焼物。岩手県から鹿児島県にかけて分布する。古語で土あるいは粘土を意味する「八二」に通ずる。筒状の円筒埴輪と、人をはじめさまざまな器物や動物をかたどった形象埴輪とがある。

起源は円筒埴輪の方が古く、弥生時代末に埋葬儀礼に用いられていた器台と壺（つぼ）が祖形である。形象埴輪は古墳時代前期後半頃から登場することから、野見宿禰を埴輪の始祖とする『日本書紀』の伝承は事実と相違する。

【播磨国風土記】はりまのくにふどき

奈良時代に編集された播磨国の地誌。成立は715年以前とされている。原文の冒頭が失われて巻首と明石郡の項目は存在しないが、他の部分はよく保存されており、当時の地名に関する伝承や産物などがわかる。

【根日女】ねひめ

根日女命（ねひめのみこと）ともいう。『播磨国風土記』などによれば、根日女は国造許麻（くにのみやつここま）の娘で、億計皇子（をけおうじ）、弘計皇子（おけおうじ）の二人から求婚され、承諾したものの、皇子たちが譲り合って結局めとらなかつたため、やがて年老いて死んだ。それを哀れんだ皇子たちは、山部小楯（やまべのおだて）を遣わして墓を造り、玉で墓を飾ったのでその墓を玉丘と呼び、墓がある場所を玉野と呼ぶようになったと伝えている。現在加西市にある玉丘古墳が、この玉丘の墓にあたるものとされている。

根日女が実在の人物か否かを判断する資料はないが、根日女の父が国造許麻と記されることから、大和政権と播磨の豪族の関係を象徴的に示す伝説の一つとも考えられている。

【玉丘古墳】たまおかこふん

加西市玉丘町に所在する、古墳時代中期の前方後円墳。古墳時代中～後期の、38基以上の古墳からなる玉丘古墳群の中核的古墳で、全長107mをはかり、周囲に馬蹄形の濠（ほり）を巡らせている。

埋葬施設は古くに破壊されているが、後円部に長持形石棺の破片が散乱していることから、石室などを設けない石棺直葬と考えられる。刀剣、玉類などの出土が伝えられるが、今は所在不明である。周濠（しゅうごう）からは円筒埴輪のほかに、家形、鳥形、壺形（つぼがた）などの形象埴輪が出土している。

加古川中流域最大の古墳で、畿内政権と密接な関係をもつ王墓と考えられる。

【光り藻】ひかりも

淡水産の微細藻類で、不等毛植物門、黄金色藻綱に属する。水面に浮かんだ部分が光を反射して黄金色に輝く。生活史の1段階で、水をはじく性質をもつ脚をのぼすため、この時期に体が水面に浮かぶ。国内で初めて発見された千葉県竹岡では、国の天然記念物に指定されている。

【伽耶院】がやいん

三木市志染に所在する天台系寺院。元は修験宗（しゅげんしゅう）に属する。山号は大谷山。縁起によれば、大化元（645）年に、法道仙人が山中の清水から毘沙門天の像を得て、孝徳天皇の勅により伽藍（がらん）を造営したのが始まりとされるが、正確な創建時期は明らかではない。歴代天皇の勅願所として保護された。

中世には、熊野詣でと修験道の隆盛を受けて栄え、全盛時には七堂伽藍130坊を有する大寺院となった。天正8（1580）年、羽柴秀吉による三木城攻めの際に兵火を受けて全山が焼失したが、その後、諸国大名の寄進などにより再建された。

本堂は、慶長15（1610）年再建という伝もあるが、解体修理時の所見などから正保3（1646）年ごろの再建とされている。堂内に、本尊の毘沙門天立像を安置する。また多宝塔は正保5（1648）年に再建されたもので、ともに重要文化財に指定されている。

このほか、鎮寺社として建てられた三坂明神社も、重要文化財に指定されている。

本尊は木造毘沙門天立像。正確な年代は不明であるが、像の様式から平安時代後期～末の作と考えられている。

【志染の石室】しじみのせきしつ

志染の窟屋（しじみのいわや）ともいうことがある。

三木市志染に所在する、自然の岩盤が浸食されてできた岩陰。『播磨国風土記』などでは、父市辺押盤皇子（いちべのおしはおうじ）を大泊瀬皇子（雄略天皇）に殺され、都を逃げのびた億計（をけ）、弘計（おけ）の二皇子が隠れ住んだ場所と伝えている。のちに弟の弘計が23代顕宗天皇、兄の億計が24代仁賢天皇となった。

現在、窟屋内にはわき水がたまっているが、ここに淡水性藻類の光り藻が発生することがあり、その際には水が金色に輝くことから、「窟屋の金水」と呼ばれている。

ひょうご伝説紀行 「二人の皇子と根日女」恋と勇気の物語

【三木城】みきじょう

三木市上の丸町に所在する、室町時代～江戸時代初期の平山城跡。

中世の東播磨を支配した別所氏が、守護の赤松氏からこの地を与えられて築城した。戦国期には浦上氏、尼子氏、三好氏などの攻撃を受け、落城と回復を経験した。その後別所氏は勢力を拡大して自立していったが、毛利氏と結んで織田信長に背いたため、天正6（1578）年から2年に渡って織田方の羽柴秀吉による攻撃を受け、天正8（1580）年に落城。

秀吉との戦いは「三木合戦」と呼ばれ、別所長治との間で激しい攻防戦があったが、特に補給路を断つ兵糧攻めは、俗に「三木の干殺し」と言われるほど悲惨なものだったという。この結果、長治は城兵の命と引き替えに切腹し、別所氏は滅びた。

本来の城郭は現在の三木市街地部分も含むものであったが、本丸周辺だけが上の丸公園として残っており、別所長治の辞世「今はただ うらみもあらし 諸人の いのちにかはる 我身とおもへば」の歌碑が建てられている。

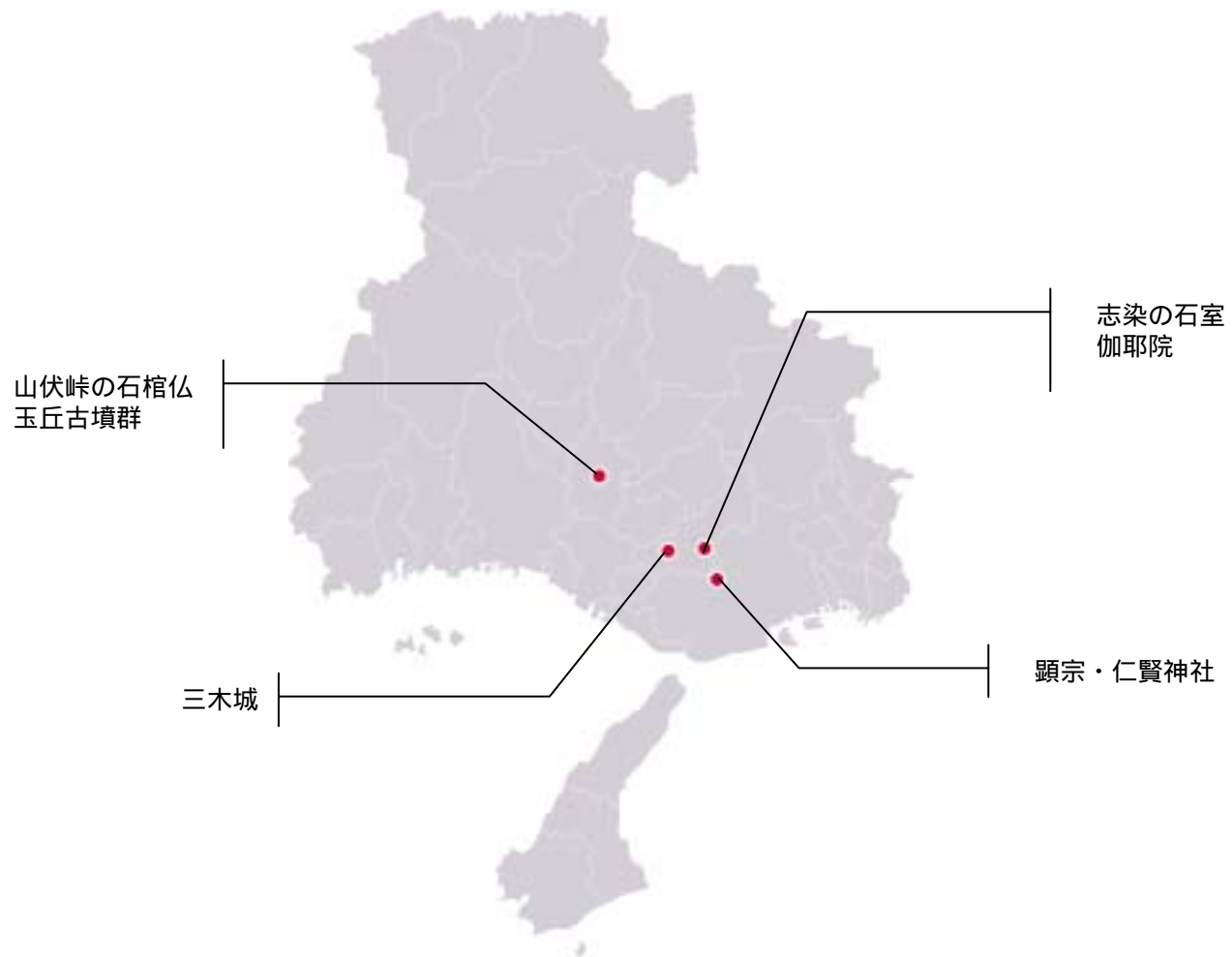
【ギフチョウ】ぎふちょう

アゲハチョウ科に属するチョウ。年に一度、4月に現れ、その美しさから「春の女神」と称えられる。播磨地域では、幼虫はミヤコアオイ・ヒメカンアオイなどを食べて育つ。食草の関係から、播磨地域では、里山の雑木林が主な生息地となっていたが、開発による生息地の破壊と、雑木林の放置による荒廃で減少しつつある。環境省絶滅危惧種 類、兵庫県レッドデータブックBランク。

参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	伝説の兵庫県	2000	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター
歴史・文化等	日本古典文学大系2 播磨国風土記	1958	秋本吉郎 校訂	岩波書店
	兵庫のふるさと散歩 2. 東播編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	神戸新聞出版センター
	日本思想体系1 古事記	1982	青木和夫・石母田正・佐伯有清 校訂	岩波書店
	新訂増補国史大系 日本書紀前篇	1981	黒板勝美	吉川弘文館
	神戸の伝説散歩	1983	田辺真人	神戸新聞出版センター

所在地リスト



志染の石室	兵庫県三木市志染町御坂
顕宗・仁賢神社	神戸市西区押部谷町木津538付近
伽耶院	兵庫県三木市志染町大谷410
三木城	三木市上の丸町
山伏峠の石棺仏	加西市玉野町山伏峠
玉丘古墳群	加西市玉丘町水塚91ほか

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日